

〔研究ノート〕

組織論で読み解く

江戸時代(7)

遠田雄志 / 小川 格*

- 目次
- はじめに
- I. 組織としての江戸時代
1. 組織の常識
- 1.1 鎖国
- 1.2 米本位制
- 1.3 参勤交代
- 1.4 世襲と身分制度 (以上第46巻4号)
2. 成長ゆえの衰退
- 2.1 武士が武器を独占した社会
- 2.2 家康を支えた譜代家臣団
- 2.3 徳川幕府の金、物、人
- 2.4 譜代筆頭井伊家の誇りと挫折 (以上第47巻1号)
3. 変化の気づきと互解
- 3.1 海外事情
- 3.2 田沼意次
- 3.3 蘭学者たち (以上第47巻2号)
4. 常識の更新
- 組織の適応モデル
- 4.1 尊皇攘夷
- 4.2 志士という名のアジテーター
- 4.3 適塾と蘭学の行方
- 4.4 幕末そして維新のあけぼの (以上第47巻3号)
- II. 江戸時代の春夏秋冬
- 組織の適応過程
1. 春
- 1.1 最後の戦争
- 1.2 改易と浪人の激増 (以上第47巻4号)
- 1.3 将軍と天皇
- 1.4 鎖国への道のり (以上第48巻1号)
2. 夏
- 2.1 元禄時代
- 2.2 5代将軍綱吉と生類憐れみの令
- 2.3 浅野浪士の忠義
- 2.4 芭蕉を生んだ元禄時代 (以上本号)
3. 秋
4. 冬
- III. 江戸時代の意味するもの
- おわりに
2. 夏
- 組織の春に続く夏は、組織の盛衰サイクルの第2の局面で、革新局面の後期である。このころになると、復古派の抵抗も封じ込められ、新秩序の基礎固めが一段落し、その定着と仕上げが目指される(前々稿「図5・1組織の春夏秋冬」を参照されたい)。
- 組織をよみがえらせた新しい常識はますます信頼されるようになり、そのため組織は成長していく。そして組織の成長がさらに常識の信頼性を高める。こうした良循環の中で組織はやがて繁栄のピークを迎える。
- 新しい常識を具現化した諸々の制度が整備されていくのはこの局面においてである。なぜならば、権力を握った革新派は復古派の抵抗を抑え込むのにかなりの精力をそれまで注がねばならなかったからである。
- さしたる抵抗勢力もなくなって、互解もますます信頼されていく常識の前に影が薄くなる。こうしたところでは、新しい常識を支持する人たちによって新しい組織の個性を反映したカル

*編集事務所南風舎顧問

チャーが生まれ伸び伸びと育まれる（これに対して、その前の春では、古いカルチャーがなおも復古派の支持を得てその影響力を有している）。

また、組織も人間と同様、遊びや余裕が必要だ。休息を取り、英気を養うためであるが、組織にあってそうした期間となりうるのは、組織が一番穏やかな革新局面の後期、すなわち夏であろう。組織に大きな飛躍をもたらすような構想やビジョンが生まれるのは、あるいはこの局面かもしれない。

しかし、好事魔多し。調子に乗りすぎてとかく現実を無視したようなビジョンを追い求めたりするのはこの時期である。そのため、せっかく再生どころか繁栄してさえいる組織の基盤にヒビが入ることが多く、正に「油断大敵」の訓戒が最も当てはまる時期である。

それでは江戸時代の夏はどうであったであろうか。それは動乱期を経た後の久し振りに落ち着きを取り戻した時期であった。確立した幕藩体制の下で、社会の仕組みがどう変わり、その中でどんな人たちが新しく台頭してきたのか。そうした時期にどんな文化、芸術が生まれ育っていったのか。

2.1 元禄時代

安定した政治状況のもとで、参勤交代の定着とともに、五街道とその宿場が整備され、西廻り東廻りをはじめ全国をめぐる舟運のネットワークが開発され、全国交通運輸網が整備された。また江戸城はその巨大な全容が姿を現し、運河や上水網も整備され、武家屋敷をはじめ寺町、町人の町など八百八町といわれた江戸の町が整ってきた。それに習って全国の城下町も次第に完成してきた。1683年、綱吉が将軍に就任して3年目に出した武家諸法度は、従来の「文武弓道の道、専ら相嗜むべき事」という第1条が削除され、第1条に「文武忠孝を励まし、礼儀を正しくすべき事」と大きく変化した。幕府は武断主義から文治主義の政治へと大きく舵をきったのである。こうして元禄という都市の文化が開く条件が整ってきた。

元禄時代を押し上げた力学

三代将軍までに確立した「組織の常識」は、すでに士農工商の各層に、そして全国津々浦々にまで広く深く浸透し、共有されていった。もはや、鎖国、米本位、参勤交代、世襲という4つの常識を疑う者はなく、これらの常識に挑戦するものもない。組織としてはきわめて安定した時代が到来した。

戦争のないこの時代、百姓の男たちはもはや戦争に駆り出される心配はなく、田畑が戦場に荒らされることもない。百姓は農業に専念することができ、安心して新田を開墾し、灌漑を進め、農機具の改良にいそしんだ。このため収穫量は年々向上し、百姓の手元に残る米も増え、経済的に余裕が出てきた。野菜、綿花など商品作物の作付けも増え、味噌、醤油、酒など加工食品も次第に都市へ向けて出荷され、農村に現金が回り始めた。商人が農村と都市を媒介し、商品が流通し、商人の活躍の場が広がっていった。こうして豊かになった百姓と商人を相手にしてさらに新しい産業が芽生えてきた。

この状況をもっとも端的に表していたのが、越後屋三井高利の成功であった。これまでの呉服商が旗本や豪商を相手に掛け売りという既得権益の上にあぐらをかいた商売をしていたのに対して、三井はこのころ興隆してきた百姓、町人を相手に、店頭販売、現金支払い、定価販売という全く新しいビジネスモデルをもって参入し、またたく間に急成長をなしとげた。

元禄時代の豪商としては、紀伊国屋文左衛門や奈良屋茂左衛門が有名だ。吉原を買い切つて金をばらまいたり、初ガツオを買い占めるなど華やかなエピソードに彩られているが、彼らは江戸で頻発する大火や日光東照宮の普請などに際して稼いだ一代限りの豪商であったのに対して、三井は社会の構造変化を読み切って対応したより本質的な新興商人であり、以後大きく発展し、今日まで三井グループとして発展し続けている。豪商と言われる中でも三井こそ元禄時代の申し子である。

こうして百姓の生活は向上し、商人も金回りがよくなって庶民の暮らしはどんどん向上していった。

元禄時代の光と影

このころの大きな変化は、住まいに見られる。畳が普及したのがこの頃である。同時に天井を張り、ふすま、障子を立て、あんどんを灯すようになった。夜まで生活時間が延長したのである。また、この時代、江戸はもちろん全国の寺院で鐘を鋳造しなかった所はなかったといわれるほど、寺院にまでお金が廻ってきた。

都市、特に江戸は、参勤交代の制度が確立したため、全国の大名が妻子を始め、多くの藩士を江戸に留めるようになった。このため、江戸は飛躍的に人口が増加してお金も集まってきた。この膨大な消費人口を養うため、整備された街道や開発された舟運を使って全国から商品が集まってきた。こうして、江戸が一大消費都市として急成長をとげた。同時に大坂は米を初め西日本の物産が集積する商都としてますます繁栄した。ここに都市文化が花開く素地が整った。元禄文化は江戸と京、大坂を中心に花開いた都市の文化である。歌舞伎、浄瑠璃、俳諧、絵双紙、浮世絵等々、元禄時代を華々しくいろどったのは、都市の非生産的な居住者たちが生活を楽しむところに芽生えた享楽的な文化である。

ここからやっとう江戸時代の独自の文化が芽生えてきたといえる。そしてそれらは今日までいきいきとして受け継がれ、今なお生き続けて、世界に日本独自の文化として認められるものとなっている。元禄時代の文化は300年後の現代に直結しているのである。

こんな文化が生まれたのも、江戸時代の最盛期、組織の夏という時代の特徴をよく反映したものであるといえよう。

生産力が向上し、商品が流通し、日常生活が豊かになるという全てが右肩上がりに循環していた時、どういうわけか、年貢の徴収率だけは年々低下していた。このため幕府の収入は減少し続けた。貿易は頭打ち、鉱山は枯渇し、そのうえ年貢が減少したのでは、幕府財政は破綻せざるを得ない。こうした状況は武士の家計を直撃した。武士の収入というものはいちど決まると一生変わらず、米で与えられたから、米価が下落すると武士の収入が増加どころか反対に減少してしまうのである。しかも衣類、食物、趣

味・嗜好品、夜間の照明など、消費生活のレベルは年々向上し、出費は増える一方であったため、武士の暮らしは年々苦しくなっていた。華やかな元禄文化の水面下で支配階級の経済力だけが低下するという、構造的な矛盾が進行していたのである。

2.2 5代将軍綱吉と生類憐れみの令

江戸時代、将軍のポストは徳川家の長兄が世襲することに決まっていた。将軍としての資質、能力の善し悪しは問題外で、家康に血のつながりの濃い者ということが最も重要な条件とされていた。

この原則は二代目秀忠、三代目家光決定の際に家康が示したものであった。二代目秀忠決定によって徳川による世襲というルールが敷かれ、三代将軍決定の際に長兄優先のルールが確立したのである。この二度の将軍決定は家康が決断を下したため、この原則は後々まで重く受け止められ、江戸時代を通じて「常識」として定着した。

四代将軍家綱は将軍になったとき11歳、しかも生来虚弱であったにもかかわらず30年も将軍の座にあった。その間、政治は保科正之や大老酒井忠清をはじめとする閣僚にまかされていた。この家綱は跡継ぎがなかったため、家綱が没した時間問題が噴出した。当時は下馬将軍と言われるほど権勢をふるっていた大老酒井忠清が京都から有栖川宮幸仁親王（ありすがわのみやゆきひとしんのう）を迎えて将軍をたてようと提言したのだ。絶大な権力をもつ酒井忠清の意見であったため、この意見に同調するものが多かった。

この時敢然と立ち向かったのが、老中堀田正俊であった。徳川家には血のつながりの濃い人物がいるのだから、と原則論を掲げて押し通し、さらに家綱の臨終に際し、枕元におしかけて遺言をとって綱吉将軍を確定してしまった。抜け駆けの功名であった。こうして堀田正俊は綱吉にとって恩人となった。

綱吉は将軍に就任すると、ただちにそれまで独裁的な権力をふるっていた酒井忠清を解任し、恩人堀田正俊を大老にすえ、さらに勝手方つま

り財政担当に任命し、全国の代官の年貢収納状況を調べ上げた。その結果不正を働いた代官を肅正し新任代官と差し替えていった。綱吉の治世はじめの10年間で全代官50名のうち26名を斬罪、切腹、島流しときわめて厳しい処分を断行している。

後に新井白石はそのころ年貢率が三割以下になってしまったと書いているから、幕初には5割から7割はあった年貢率を思えば、それがいかに激減したかがわかる。その主な理由は年貢の徴収にあたっている代官の腐敗による年貢徴収率の低下であったから、綱吉がまずはじめにここに鉄槌を下したのは当然であった。

なにしろ当時の幕府は家康の残した巨大な遺産を、東叡山、日光東照宮の造営など、家光の壮大な無駄遣いや、江戸の大半を焼き尽くした明暦の大火(1657年)の復興のために使い果たし、さらにこの頃には全国のお金山が枯渇してしまった。幕府にとって唯一の収入源は、全国にちらばった直轄領からの年貢以外にはなくなっていたのである。その年貢の徴収率が低下していることは幕府にとって深刻な事態であった。腐敗した代官の差し替えという毅然とした政策は、成すべきものであったとはいえ、綱吉政権の清新さを強く印象づけるものでもあったのである。

迷信に取り憑かれた母子

綱吉の29年間の治世は前半8年と後半21年に二分されると言われている。前半は堀田正俊が主導権を握って政策を推進していた。この期間には剛直な正俊に押さえられて綱吉の特異な性格が政策に直接投影されることはなかった。

腐敗した代官の肅正なども正俊ら幕閣の手腕であろう。

しかし、1684年、正俊が若年寄の稲葉正休(いなばまさやす)に突然殿中で刺されて倒れると、綱吉は俄然自分の特異な個性を発揮しはじめた。このため正俊の刺殺は綱吉のさしがねではないかと一部でささやかれるほどであった。

綱吉の母親は、京都の八百屋の娘であった。たまたま美人であり、殿中に奉公にあがってま

すすみきがきがかかってきた所を家光に見初められ、生んだ子綱吉がたまたま將軍になった。彼女は偶然が重なって將軍の母親になったのである。將軍の単なる気まぐれが次の將軍を作り、母とともに権力をふるう。江戸時代の世襲制にはこんな偶然が紛れ込むという重大な欠陥があったのである。

綱吉の母桂昌院(けいしょういん)は、自分の将来を言い当てたという僧侶隆光(りゅうこう)を優遇し、その僧侶を大奥の護持僧として寵愛し、その助言を信じ込んでしまった。すなわち桂昌院は、綱吉に子供が出来ないのは前世に生き物を粗末にしたからだ、生き物を大切にすれば男子が生まれるという隆光の助言をまに受けたのである。

一方、綱吉は、学問好きと言われていたが、特に儒学にのめり込んでいたから、母親への孝行を何よりも大切な徳目とし、母親桂昌院の迷信をそのまま信じ込んでしまった。このため僧の助言と母親の熱心な勧めに従って動物愛護の法令を次々に出していった。

最初に出されたのは、「重病の生き物を生きているうちに捨ててはならない」というものであった。それ以降、つぎつぎに60回も動物愛護の法令が出された。それでも男子が生まれない、効き目がないので、さらに助言はエスカレートし、將軍が成年なので、犬を大切にするようにと言われ、犬を溺愛し、それ以降特に犬を保護する法令を次々に出していった。それによって増えすぎた野犬を保護するため大久保に2万5千坪、中野に16万坪の大規模な犬小屋を作り、8万2千頭もの野犬を收容し、専門の飼育係を定めた。その年間の維持費が10万両、それをまかなうため、幕府直轄領に特別に税金を課した。

生類憐れみの令にふれたため処罰された者は数知れず、極端な例では、子どもの病氣治療のためにツバメを吹き矢で殺したところ、親子とも斬罪になってしまった。綱吉の死後、この法のために捕らわれていた者8831人が赦免されたというから、この法令がいかに人々を苦しめていたか分かりますというものである。

綱吉はその死に際して、次の將軍家宣(いえ

のぶ)をはじめ老臣たちを枕元に呼び寄せ、生類憐れみの令だけは何かあっても百年後も続けるようにと遺言を残した。それほどまでにこんな迷信にとらわれていたのである。

生類憐れみの令が100%時代錯誤の間違った政策だったとは言いきれない。殺伐な戦国時代の気風が遠のくにつれ、生命尊重の空気が次第に強くなっていたことは確かだ。現代でも希少生物保護の機運に便乗して、シーシェパードのように狂信的な生物保護活動も出現し、この運動を支援する国まである。生類憐れみの令も狂信的な生命尊重運動を将軍が主導して行なったものであり、多少は理解する気持があったとしても、人命を奪ってまで推進するなどどう考えても異常な行動であった。

綱吉の政治は前半8年と後半21年に二分されると先に書いたが、前半は主として綱吉を押さえ込んだ堀田正俊によって推進され、後半は綱吉がほしいままな政治を行なった。しかし、こんな悪政にも関わらず、政治的な危機には到らず、幕藩体制は安泰であった。元禄時代は組織の力がピークに達した時であり、こんな脱線した将軍をも包み込んでしまうだけの余力があったのである。航空機も事故が多いのは離陸時と着陸時である。上空で巡航速度に入るときわめて安定した飛行をほとんど自動運転で続けることができる。パイロットが副操縦士とふざけていても飛行機が墜落する心配はない、元禄時代はこんな時代だったのである。

江戸時代、生類憐れみの令に対する庶民の不満は少なくなかったが、それを上回る生活の豊かさ、将来への期待感、昂揚した気分が庶民を飲み込んでいたのである。それが元禄という時代だった。

2.3 赤穂浪士の忠義

徳川三代をへて完成した幕府の全国支配の体制は万全であり、もはや幕府に対して弓を引くものはいなかった。幕府の武力は270余の藩に対して圧倒的に強大であった。ほとんど理由にならない理由で領地を召し上げる「改易」を言い渡されても、異議を申し立てたり、城の明け渡しを拒否するものはなかった。たとえば、肥

後53万石の加藤清正の三男加藤忠広が幕府に対する謀反の疑いなど諸説あるものの、いずれもデッチあげとしか思われぬ口実で改易を申し渡されたとき、一部の武将は城明け渡しを拒否して一戦を交えることも辞さない決意を固めた。しかし、主君は江戸に滞在しており、人質同然の立場である。どうしても幕府の言うままにならざるを得なかった。幕府の圧倒的な武力の前に不満を言うことすらできない状態なのであった。浅野内匠頭(あさのたくみのかみ)による松の廊下の刃傷(にんじょう)事件はこんな力関係の中で起こった。

1701(元禄14)年3月14日、浅野内匠頭が江戸城松の廊下で、吉良上野介(きらこうずけのすけ)に切り掛かった事件は、内匠頭に対して、即日切腹の沙汰があり、その日の夕刻、田村右京太夫建頭(たむらうきょうだゆうたてあき)邸の庭先で行われた。浅野家の築地鉄砲洲の上屋敷と赤坂南部坂の下屋敷はただちに没収され、播州赤穂城は一ヶ月後に明け渡し完了し、この事件は幕を閉じた。幕府の有無を言わさぬ強固な裁断であった。幕府にとってはこれで決着がついたはずであった。

しかし、この一連の処罰は赤穂藩士にとって堪え難いものであった。まずは主君の無念を思った。35歳という働き盛りの主君が前後の見境もなく、殿中で刃傷に及ぶとは、短慮にすぎるとはいえ、耐え難い屈辱を受けたのに違いない。しかも、切りつけた相手吉良上野介は軽い傷に終わったうえ、何のお咎めもなかった。

また彼らは幕府の仕打ちを憎んだ。たいした取り調べもなく、相手が軽傷にもかかわらず、即日切腹とは納得できない。また、5万石のれっきとした大名に対して庭先で切腹とは甚だしい侮辱である。しかし、幕府・将軍のとった処置に対する不満はいくら強くとも表に出すことはできなかった。こんな強大な幕府に楯突くことは考えられない。そうした浅野家臣団の不満は上野介への憎しみとなって一本化していった。つまり討ち損なった主君の仇を討って主君の無念を晴らしたいという感情へとなだれ込んでいったのである。

幕府への不満を表に出すことは危険だが、仇

討ちなら文句はない。また、江戸市民の感情も次第に仇討ちを期待するものとなっていった。庶民感情としては、普段から横柄で権力を笠に着たうえに賄賂好きという噂の絶えない上野介は人気がなく、事件後はさらに反感が強くなっていった。さらに、当時いよいよ強化された生類憐れみの令によって市民は苦しめられていた。將軍綱吉の悪政に対する不満も鬱積していたのである。浅野はいつ吉良を討つのだという噂が江戸市中を駆け巡っていた。

このため、江戸へでた浅野浪士の気持ちはますます敵討ちへと駆り立てられていった。この敵討ちという感情の中には、吉良への憎しみと同時に暗黙のうちに幕府への抗議の意志が込められていたのである。赤穂浪士の気持ちももちろん、江戸の市民感情も敵討ちの形をとった幕府への抗議行動を期待するむきがあった。

しかも、襲う相手は幕府の高家（こうけ）筆頭吉良上野介、將軍に代わって天皇に対する年始の挨拶に上京するほか、朝廷との儀礼的なやりとりを取り仕切る要人であり、厳重に警備された広大な屋敷の中に潜んでいる。個人で簡単に打ち取ることの出来る相手ではない。どうしても組織的に集団で襲うしかない。47人という集団の行動は敵討ちというより軍事行動に近いものがあり、単純な敵討ちとは言いがたいものである。

敵討ちは江戸時代には公認の行為であり、町奉行へ届け出れば、許されたのである。しかし、赤穂浪士の場合、この届けはない。相手が幕府の最高の要職である高家なので、敵討ちといっても認められるはずがない。また吉良が浅野を殺した訳ではなく、内匠頭に死を宣告したのは幕府なのである。したがって、吉良の討ち取りを敵討ちとするのにはやや正当性に疑問が残る。どうしても幕府権力に対する反乱という要素が否定できない。

赤穂浪士の行動は、いわゆる敵討ちという形をとりながら、しかし厳重警備の幕府要人を組織された集団で襲うという、反乱とのきわどい隙間をついて行われた。大石内蔵助（おおいしくらのすけ）の、時代を読む深い洞察力といい、茶屋遊びで世間の目をはぐらかすなど慎重で用

意周到な気配りといい、驚くほかない。

討ち入りは、1年9ヶ月の後、1703（元禄15）年12月14日、吉良邸で茶会が行われることを聞き出し、それならば上野介の在宅は間違いなしと確認したうえで、翌15日早朝に吉良邸の表門と裏門それぞれに23人ずつ二手に分かれて突入した。約二時間の戦闘ののち、ついに上野介を発見し討ち取った。浅野側はほとんど無傷、寝込みを襲われた吉良側は16人が斬り殺され二十数人が負傷した。浅野浪士46人は上野介の首を持って泉岳寺まで整然と行進し、内匠頭の墓前に上野介の首を供え、仇討ちの成功を報告し焼香した。慎重に計画された行動は一糸乱れず完璧に成功した。

ここで、2年程前に終わったはずの刃傷事件が再び幕府の頭を悩ませる第二の事件へと展開した。通常なら、こんな徒党を組んだ要人襲撃事件は、即刻打ち首で決着が着くはずのものである。まして、時の將軍は綱吉という即断即決を好む独裁者である。ところが、幕府は判決までに1ヶ月以上も逡巡したのである。

この事件を巡って幕閣内の議論は大きく二つに分かれた。

一つは、赤穂浪士の行為は主君に対する忠義の実践であり、大いに讃えたいと言うもの。特に目につくのが室鳩巢（むろきゅうそう）の「前代未聞の忠義」という意見だ。

他の意見は、集団で徒党を組んだ行動は幕府



図1 大石内蔵助

の法に触れるから許されないとやるもの。

結論は、武家諸法度に違反し許されない行動なので、罪を免れないが、主君の恥をすすぐ忠義の行動でもあるため、武士として遇し切腹とする、というものであった。こうして翌年の2月4日、46人全員が切腹した。

当時の議論の枠組みはこのようなものであった。つまり、本来ならただちに刑が執行されて不思議のない事件であったにも関わらず、1ヶ月半もたってやっと刑が確定し執行された。しかも集団で徒党を組んだ反乱に対して武士にとって名誉ある切腹という処分である。この矛盾した奇妙な判決は幕府にとってそれだけ難しい決断だったことを示している。

学問好き将軍の急所

幕府はなぜそんなに悩んだのだろうか。実は将軍綱吉が無類の学問好きだったことが関係している。綱吉は学問と縁のなかった父家光の強い希望により、幼少時より学問に親しんだと言われている。当時の学問とは、家康がその幕藩体制の正当化のために普及をねらった儒学とくに朱子学であった。儒学が日本に本格的に普及したのは江戸時代と言われているが、特に五代将軍綱吉はとりわけ儒学の普及に熱心であった。その中心的な教条が忠孝、特に主君に対する忠義だったのである。

彼は将軍につくやいなや、1682年全国津々浦々に高札を立てた。彼の高札のユニークな点は「忠孝札」と呼ばれるもので、武士に対しては主君に対する忠義を、庶民に対しては親に対する孝行を求めたのである。綱吉は儒学に心酔し、自ら儒学を全国に普及し、善政を敷こうとしたのである。つまりこの元禄時代は忠孝という徳目の一大キャンペーンの真っ最中だったのだ。

綱吉は江戸城で「論語」「孟子」「中庸」などを講じて人々に聞かせ、「易経」の講義だけでも元禄6年から13年まで240回にも及んだほか、大名の邸宅にも足繁く訪れそこでも繰返し講義を行なった。

赤穂浪士の討ち入りは、この風潮に乗じて行われた。事件を聞いた綱吉は思わず「忠義な行

動ではないか」と叫んだという。自分が切腹を申し渡した大名の家臣が仇討ちとして幕府の高官を集団で襲撃したというのに、将軍がそれを忠義な行動だというのだから、綱吉という将軍の支離滅裂な性格がよく現われているといえよう。綱吉は大石内蔵助と「忠義」という目標を共有し共感してしまったのである。綱吉にとってはもっとも推奨している急所を突かれたわけだ。こうして吉良邸の襲撃は忠義の美談か、徒党の反逆罪か判断に苦しんでしまったというわけだ。

この時代には、現実の権力関係を超越する「忠義」という観念がひとり歩きし、すでに強く人心を支配し始めていたのである。それは、反幕府的な行動であったにも関わらず忠義という抽象的な観念を根拠にして公然と擁護する学者がでてきたことからもうかがえる。ここに、家康が導入し江戸時代に急速に普及した儒学の道徳観念の浸透がみられる。結論からいえば、忠義よりも反乱的な要素を重視した判決ではあるが、切腹という形式を許したことによって47人の「義士」という位置づけが確定したのである。大石内蔵助は命は失ったものの、忠義の臣として後世に名を残した。この時期、忠義の観念が強く求められた背景には、戦国時代の遺風である下克上の気風を一掃し、体制の安定を追求するという幕府の思惑が強く働いたという側面もあった。

忠臣蔵と桜田門外の変

ここで、江戸時代を鳥瞰するというわれわれの視点から赤穂浪士の討ち入りを見直してみよう。すると、幕末にやはり徒党を組んで幕府高官を襲撃して打ち取るという類似の事件があったことに気がつく。桜田門外の変である。こちらは、水戸の脱藩浪士18人が幕府の大老井伊直弼(いひなおすけ)を襲撃して首をとった事件である。井伊大老は行き詰まった幕府の権威を立て直すべく、いわゆる安政の大獄を実行した。このため吉田松陰、橋本左内など前途有為の青年たちが多数投獄され、さらに打ち首などの極端な処分が行われ、その上うるさ型の水戸藩の前藩主徳川斉昭(とくがわなりあき)が永蟄居

とされた。危機感にかられた一部藩士は脱藩して江戸城桜田門外に登城中の彦根藩の行列を襲い、大老井伊直弼の首を取った。これはある意味で仇討ちであり、反幕府の決起である。しかし、この場合は、だれも敵討ちとは言ってくれない。反幕府的なテロリズムと考えられてしまった。

大老を打ち取ったあとの行動が赤穂浪士とは大分異なることがその一因であろう。各自ばらばらに逃げ、最終的には全員が自刃または打ち首になっている。彼ら自身テロリズムを自認していた証拠であろう。注目すべきことは、大老の首を落として持ち去るという特異な行動である。彼らは首をどこかに持って行くという目的があったわけではない。おそらく首を取り、持ち去るという行動は赤穂浪士の吉良邸討ち入りのイメージがあって、無意識にその行動を模倣したのであろう。

そこで赤穂浪士の討ち入りと桜田門外の変とを比較してみると、赤穂浪士の事件後整然と引き上げ、幕府の裁定を待つという行動が異常に不自然に見えてくる。つまり、桜田門外の変が吉良邸討ち入り事件の特異性をあぶり出してくれるのである。あぶり出された真実は、吉良邸討ち入りは実はテロリズムでありながら、主君の仇を討つ敵討ちの形式をとったということである。つまり、赤穂浪士討ち入りは偽装されたテロリズムだったのである。

忠臣蔵が当初から忠義の行為という議論に惑わされたのは、この時代の忠孝キャンペーン、さらには綱吉の猛烈な学問好き、論語をはじめとする儒学の普及時期だった事、そのうえ大石内蔵助の深謀遠慮が大きく作用していたのではないだろうか。幕府が音頭をとって進めた忠孝普及活動が吉良邸討ち入りを忠義の見本としてしまったのである。

儒学はこののち、学問好きの大名、藩校を通じて普及し、幕末には藩校、寺子屋を通じて全国に普及してゆく。子どもの論語の暗誦は、常識となっていた。特に幕末にいたって国の行く末を案ずる志士を各地に生み出し、彼らの精神的な支柱となって、倒幕へとつき進ませたのは、この儒学だったのである。西郷隆盛、吉田松陰

などは熱烈な儒学の学徒となり、思想を実践にうつしたのである。松陰は過激な言動をやめない自分から離れてゆく弟子達に向かって「僕は忠義をする積もり、諸友は功業をなす積もり」と檄文を投げつけている。綱吉が体制の強化のために普及に努力した儒学は皮肉にも幕末にいたってついに反体制の武器と化したのである。

綱吉にとって儒学は全国統治のための役に立つ思想であり、自分の将軍としての使命感を満足させてくれる便利な道具であった。しかし、普及してゆくにしがたって主君に対する忠義は必ずしも将軍に対する忠義とは限らないことが明らかになってきた。赤穂浪士の事件は主君への忠義が実は将軍にとって危険な凶器となりうることをすでにこの時示唆していたのである。それがあらわになるのは、150年という歳月がたつて徳川幕府が傾きかけた頃であった。

赤穂浪士の事件はただちに歌舞伎に取り上げられ、幕府のかさなる禁止をかいくぐって繰り返上演され、今日にいたるまで歌舞伎の代表的な演目となっている。事件としては、大勢の死者を出した残忍で殺伐としたものであったが、幕府は事態の進行を傍観していたし、吉良側の上杉家も何ら動こうとはしなかった。なぜか全体が整然と芝居がかった祭りのような人々の興奮をさそうものがあるのは元禄という時代のせいであるかもしれない。この点も幕末に起こった桜田門外の変と比較するとその差が明らかである。桜田門外の変の場合は、これによって、幕府も、水戸藩も、彦根藩も一触即発という、体制を揺るがすような危機に立たされ、こちらはひたすら陰惨な印象が強い。これと比較して、赤穂浪士の事件では、体制は微動だにせず、矛盾をかかえたまま、忠臣蔵というエンターテインメントに巻き込んで市民を楽しませてしまうという、いかにも元禄時代ならではの、豊かさとおおらかさを感じさせる事件であった。

2.4 芭蕉を生んだ元禄時代 時代を超越した芸術

松尾芭蕉の俳句で最も親しまれているものとして「古池や 蛙飛び込む 水の音」という句がある。

子供でも理解できるほど簡単明瞭であり、ならそれ以上の難しい解説を必要としない俳句である。この句は出来てから300年という年月を隔てているにもかかわらず、時代の落差を全く感じさせない、今日の我々にもなんの障害もなくまっすぐに理解でき、楽しめるということは、驚くべきことではないだろうか。

もう一つ例をあげよう。

尾形光琳の「燕子花（かきつばた）図屏風」という6曲一双の屏風がある。高さ1.5メートル幅3.38メートルという大きなものである。東京の根津美術館に収蔵されており、時々公開される国宝である。日本美術の教科書あるいは琳派の本には必ず紹介されているため知らない人はいないだろう。

全面に金箔を貼りつめた背景の上に、カキツバタが三々五々ランダムに生い茂った様子が、葉の緑と花の青と単純な2色で大胆に描かれている。これも、今日だれが見ても何の違和感もなく、300年の時空を一瞬に飛び越えて共感できるばかりでなく、江戸時代のみならず日本美術を代表する作品として世界中に強い影響を与えている傑作である。

こうした卓越した芸術家、芸術作品を生み出したのが元禄という時代であった。この時代は「生類憐れみの令」という日本史上例を見ない悪法を押しつける独裁的な将軍が支配していたにもかかわらず、これだけの芸術を生み出したところにこの時代の力強さがある。

なぜ元禄時代はこうした時代を超えた芸術を生み出すことができたのか、その理由を検討してみよう。

俳諧師、松尾芭蕉

「古池や」の他にも、芭蕉にはこんな平明な名句が沢山ある。

山路来て 何やらゆかし すみれ草
夏草や 兵（つわもの）どもが 夢の跡
静かさや 岩にしみ入る 蟬の声
荒海や 佐渡に横たう 天の河
秋深き 隣は何を する人ぞ

この時代までの俳句は、古典文学の基礎知識がなければ、理解できないのが普通であった。

つまり、万葉集、源氏物語、新古今和歌集、さらに中国の杜甫、陶淵明などの詩文を知り尽くして、その知識をベースにして、引用し、ひねりを効かせて、どうだという知識や腕を競うものであった。そうした句は今日では、解説を読まなければ、まったく理解できないものがほとんどである。

この時代の俳句は俳諧と言われていたが、今日のように単独で作られ鑑賞されていたわけではなく、数人が同席して、前の句を受けながら、少しずつ意味をずらし、あるいは展開して、次にバトンを渡して行く。あくまでもその場で即興につくる連句という集団の遊びであった。その一つ一つに全精力を傾注して、古典的教養をさりげなく折り込み、前後をつなげつつ、同席者をうならせる競技であった。

その中の一句を取り出しても、その場の状況が分からないと理解できないことが少なくない。このため連句の鑑賞のために古来数多くの注釈書が出されてきた。

ところが、芭蕉は晩年にいたって、そうした場の状況や古典的教養を超えようとして努力をかさねた。芭蕉はそれを「軽み」と表現し、追求したのである。そこに歴史的背景や時代的制約を突き抜けた普遍的な価値をもった作品が誕生した。俳句の大衆化への道を開いたのである。このため、俳句は現代でも多くの理解者をもつことができるばかりか、世界中に愛好者が広がっている。

もっとも、古池の句でも元禄時代の時代的背景がしっかり読み込まれているという説もある。この当時、五代将軍綱吉は生類憐れみの令を連発し、馬、牛からはじまって、犬、猫、さらには、鯉、金魚まで保護することを求めた。

こうした時代に、それまであまり俳句に取り上げられることのなかった蛙を取り上げたところに、芭蕉の時代状況への読み、言い換えれば将軍への迎合が見えるというのである。分析としてはおもしろいが、そんな時代背景を知らなくともこの句は十分に理解し楽しむことができる。

こうした地点まで到達した芭蕉が、今日まで誰にも親しまれ、愛されていることは当然のこと

とであろう。

しかし、なぜこの時代にこんな時代を超えた作品が生れたのであろうか。芭蕉の生涯をたどってその理由を分析してみよう。

芭蕉の生涯

松尾芭蕉は1644（正保元）年、伊賀上野に生まれ、1694（元禄7）年51歳で亡くなった。17世紀後半に生き、元禄時代に最後の成熟期を迎えた人である。

芭蕉は29歳まで伊賀上野ですごし、その後江戸へでた。江戸在住は22年間であるが、その後半は旅から旅へとほとんど定住していない。

この放浪にあけくれた最後の10年ほどが芭蕉の成熟期、真の芭蕉らしい境地に達した時期であった。

まず、伊賀上野での29年間は芭蕉の修業時代である。たいして豊かでもない農業を主とした一家の次男坊、普通ならなにも取り柄のない人生が待っているはずの芭蕉が、大きく人生をかえるきっかけとなったのは、伊賀上野を治めていた藤堂藩の重臣藤堂新七郎家に奉公にでたことであった。藤堂家の世継ぎと決まっていた若い良忠の遊びのお相手役にとりたてられて、10代から20代にかけてその俳諧趣味につきあわされた。これが芭蕉の進路を大きく変えるきっかけとなった。俳諧のお付き合いから、当時の俳壇の全国一の座を占めていた京都の季吟（きぎん）とのパイプができた。この時期に芭蕉の俳諧のセンスと基礎知識が形成された。併せて日本文学の基礎的教養もこの時に身に付けた。

家柄も財産もない芭蕉が幼いうちから藩の重臣の世継ぎのお相手役にとりたてられたのは、芭蕉のもって生れたセンスのよさ、人の心をつかみ、場を盛り上げる力が抜きこんでいたからにほかならない。

芭蕉はやがて伊賀上野という地方都市ではあるが、当時興隆してきた俳諧仲間の中で頭角をあらわし、総力を傾けて句集『貝おほひ』を編纂した。芭蕉はこれにかなり自信をもって、江戸へ出た。伊賀上野から都市を目指すなら京都または大坂の方が手近なはずだが、あえて江戸を選んだのは、大坂には2歳年上の西鶴のよう

な大物の俳人がすでにいたからである。西鶴はのちに『好色一代男』など浮世草子によって作家の地位を確立するのだが、当時は俳人として活躍し、大坂の俳壇を支配していた。このため、大坂には田舎者が出ていって割り込むすきはなかった。それに対して江戸は、発展途上であり、力さえあればチャンスがあったからである。芭蕉の野心が江戸を選ばせたのだ。

江戸へ出た芭蕉は迷わず日本橋に住まいを構えた。当時の日本橋は江戸の商業の中心地であった。米、魚など荷物を満載した船が集結し、川岸には魚河岸をはじめ、商人の蔵や屋敷がひしめき合っていた。この町で芭蕉は俳諧の腕試しに乗りだした。裕福な商人が目当てだ。ここで句会に顔を出しているうちに、たちまちにして頭角を表して弟子をとるようになり、5年目にして俳諧の宗匠（そうしょう）として名乗りをあげたのである。この当時は桃青（とうせい）と名乗っていた。

芭蕉は宗匠となるや、めきめきと頭角を表し、たちまちにして江戸でも一、二を争う俳諧師として評判となった。江戸へ出て8年目には『桃青門弟独吟二十歌仙』を出版し、大いに氣勢をあげた。大勢の門人達を集め、江戸における俳諧の巨匠として、自信まんまんだった。ここまですべて俳諧師としては十分に成功をおさめたといえる。

しかし、この年、芭蕉は突然、隠退を表明し、日本橋から深川に居を移してしまう。日本橋なら、まわりにいくらでも裕福な門人を集めることができるが、深川は当時は寂しい郊外であった。宗匠をやめ、経済的な活動から一切手を引き、引きこもってしまった。当時、俳諧師は弟子の指導だけでも収入はあり、評判の俳諧師なら十分食べていけた。しかし、芭蕉はこうした活動からも手を引いてしまった。ではどうしたか、俳諧一筋に邁進し、生活は弟子達の寄付行為に頼る赤貧の生活に入ったのである。

これから、14年間、芭蕉は深川を拠点にしながらも、繰返し旅に出てゆく。この当時、深川の芭蕉庵には茶碗10個、包丁1本、米を入れる瓢箪しかなかった。その瓢箪に門人たちが米を入れていった。茶碗10個に、人をもてなすこと

を楽しんだ芭蕉の面目躍如たるものが見える。

門人の中でまず注目したいのが、杉風（さんふう）である。この人は幕府御用達の裕福な魚問屋であるが、当初から芭蕉の門人となり、しかも生涯にわたって芭蕉を経済的に助けたのもっとも強力で誠実なスポンサーとなった。深川の芭蕉庵を提供し、火災後再建したのも杉風であった。深川では、杉風をはじめ門人たちが芭蕉の生活を支えた。

また、旅に出ると、次々に地方の門人に招かれて、人々を訪ね、そのたびに門人達と連句の会をもった。これが門人を増やす活動にもなり、やがて全国に芭蕉の門人をかかえるという結果になった。旅行は門人たちに助けられ、門人たちの手引きで移動した。同時に芭蕉は旅行のたびに紀行文をまとめ、その完成に心血を注いだ。しかし、不思議なことに芭蕉は生前にそれを出版しようとはしなかった。それが高い評価を受けるのは、芭蕉の死後のことである。

紀行文としては『野ざらし紀行』『鹿島詣』『笈（おみ）の小文』『更級紀行』最後に『奥の細道』が残された。今日では、芭蕉の作品として最高の評価を受けているのは『奥の細道』であるが、芭蕉はこれを完成すると故郷の兄に手渡し、それで終りと考えていた。当時はまだ俳句の紀行文などというものは確立しておらず、評価は期待できなかった。芭蕉は後の世には評

価されるはずだと考えていたのかも知れない。

俳人芭蕉の誕生

ここで検討してみたいのが、芭蕉という、伊賀上野から単身江戸へ出てきた中年男が、たった5年で、高い評価をうけて弟子をとり、8年後には江戸で抜きでた俳諧師として評価され、その後全国に門人のネットワークを形成していった足跡である。

まず、その門人の多彩さに注目したい。商人はもちろん、武士、しかもかなり上級の藩士、医師、僧侶、町のごろつき、犯罪人などきわめて幅が広いのに驚くほかない。名もない地位もない地方から出てきた男に、こうした人々が争って入門した。芭蕉は単に俳句のうまい枯れた風狂の人ではなかった。一度の句会で同席する人々の心をわしづかみにする、非常に魅力あふれる人柄だったようだ。また、そこには、芭蕉の高い技量に対して、身分にとらわれることなく、なんの偏見もなく、評価し教を乞うという、開放的でおおらかな人間関係が見えてくる。連句の会となれば、このような武士も商人も、ごろつきのような人すらも同席し、遠慮なく批評しあい、笑いが絶えなかった。

きびしい身分制度にとらわれていたこの時代、俳諧の世界は開かれていた。参勤交代で江戸に在勤中に入門した彦根藩士の許六（きょく）のような人もいれば、宝井其角（きかく）のような遊び人もいた。其角や嵐雪（らんせつ）は芭蕉にとってお荷物のような門人だが、芭蕉は彼らのようなきらめく才能をもった男たちを愛し、育てた。

其角は「夕涼み よくぞ男に うまれけり」などの句で我々にもなじみ深いが、根っからの遊び人であった。しかし、彼は芭蕉なきあと、江戸の俳諧を牛耳るほどの実力を発揮した。元禄時代の江戸は身分を超えたこんな会が成立するところだったのである。見方をかえれば、彼らが芭蕉という才能を発見し、育てたのである。そこに元禄時代の江戸の、開かれた社会の力強さが見えてくる。元禄時代が芭蕉を発見し、育てたのである。

また、全国に門人をもっていたという側面に



図2 松尾芭蕉

注目してみたい。たとえば、41歳のときに故郷へ向かった旅がある。後に野ざらし紀行の旅といわれた旅であるが、この旅で芭蕉は各地でいろんな人を訪ね、泊めてもらい、門人を増やしている。旅立つにあたって、

野ざらしを 心に風の しむ身かな

と、行き倒れを覚悟した悲愴な思いで出発した。しかし、大垣には廻船問屋の谷木因(たにぼくいん)が待ちかまえており、木因の手引きで名古屋の俳諧仲間に紹介された。名古屋ではリーダー格で医師の荷兮(かへい)、呉服商で町総代をつとめる野水(やすい)、米穀商の杜国(とこく)など豊かで教養のある商人たちが歓迎し、連日のように句会が催され、彼らは次々と芭蕉に入門し、名古屋の蕉門が形成された。あまりにも居心地がよかったので、野ざらしの決意を忘れて、芭蕉は名古屋に一ヶ月も滞在した。

このように門人たちが各地で旅に出た芭蕉を待ちかまえていたのである。全国の俳諧好きの人々が芭蕉を支え、蕉門俳諧の普及に邁進したのである。芭蕉の門人は最後には全国で2千人に達したと言われている。短期間に全国にこれだけ多数の門人のネットワークができあがったことになる。この時代になぜこんなことが可能だったのだろうか。

今日なら、新聞、雑誌、テレビ、インターネットという通信網が一瞬にして全国に情報を発信することができる。しかし、当時は情報は全て、人が歩いて持ってゆくほか伝える手段がなかった時代である。

ここに見落としてはならないのが、参勤交代である。地方から江戸へ隔年に登ってくる武士達。彼らは江戸で1年を過ごし、そこで得た最新情報を地方へ持ち帰った。江戸の情報は1年または2年で確実に全国に伝わったのである。

例えば、彦根藩士許六は江戸在勤中に芭蕉庵を訪ねて入門し、芭蕉の手厚い指導を受け、彦根へ帰ったあと、彦根俳壇の中心となって門人たちの指導にあたり、自らが芭蕉の正統の後継者であると自負して次々に句集を出版した。

商人たちも地方から江戸へ商業活動の範囲を広げており、彼らも重要な情報の伝達者であっ

た。江戸で高い評価を受ければ、それはたちまち全国にとどろきわたる。膳所(ぜぜ)の商人で門人である正秀(まさひで)は、奥の細道の旅の最後に芭蕉が天津に立寄ると、そこに芭蕉のために新しい庵を建てようとした。これに対し芭蕉は「拙者、浮雲無住の境界が大望ゆえ」あまり大きな建物は建てないでほしいと頼んでいる。

京都では門人の去来(きょらい)が嵯峨野に所有する「落柿舎(らくししゃ)」に滞在し、ここを拠点にして京都の門人たちを指導した。このように行く先々で門人たちが旅する芭蕉を助けたのである。それだけ、豊かで趣味を楽しむ余裕のある人々が各地に育っていたことがわかる。社会に余裕ができてきたのである。

また、元禄時代にはようやく江戸が日本の中心になってきた。江戸で人気を博した芭蕉の情報はたちまち全国に伝わった。芭蕉が江戸を目指したのは正解だったのである。交通、情報網の完成、豊かな経済、そして文化の成熟、これが俳人芭蕉を生んだ条件であった。そんな時代が元禄時代だったのである。

夏、それはものみな生命の最も輝く季節である。組織もまたそのとき最盛を迎える。

「組織の適応モデル」によれば、組織の夏は「組織の盛衰サイクル」の第2の局面で、革新局面の後期である。組織はなおも成長を続け、復古派の抵抗も鎮静している。組織の屋台骨は少々のことでは揺るぎそうにない。そのため、組織には進取の気性が満ちている。その上、改革派が苦勞して確立した権力はさしたる抵抗もなく引き継がれている。その後継者はといえば、とにかく苦勞知らずでしばしば思い切った施策を打ち出す、こうした中で、新しい組織に固有な新しい文化、芸術が芽生えるのだろう。

そこで、江戸時代の夏を捉えるためにわれわれは、

1. 「無事の世」の下、町人が新興勢力として台頭してきた元禄時代
2. 「思い切った」というより暴走ともいうべき生類憐みの令を施行した五代将軍綱吉
3. 幕府要人に対するテロを忠臣の鑑として物

語られてしまった赤穂浪士討ち入り事件
 4. 伊賀上野のやや遅咲きの田舎出一躍時代の
 寵児, 俳聖とまでまつりあげられた松尾芭
 蕉

といったトピックスを採り上げ、検討してきた。
 何とも若々しいエネルギーに満ちた時代であっ
 た、江戸時代の夏は。

ということで、江戸時代の夏は三代将軍家光
 が亡くなった1651年から元禄時代を経て、五代
 将軍綱吉が亡くなった1709年までといてよい
 だろう。

ところで、司馬遼太郎の『世に棲む日々』に
 「どんな人にも人生の春夏秋冬がある」との
 一文がある。一方、組織そして組織の春夏秋冬
 を象徴するものの一つが組織のトップである。
 してみると、組織としての江戸時代の春（それ
 は新秩序の基礎固めの季節である）を象徴する
 いわゆる春将軍は家康で、夏将軍は綱吉とでも
 なろう。ひるがえって、戦後から今日までの現
 代日本の春を象徴するのが吉田茂、夏は田中角
 栄とすると、われらが菅総理大臣は何を象徴し
 ているのだろうか。

(イラスト：坂田 融)

〔参考文献〕

- 嵐山光三郎 (2006) 『悪党芭蕉』 新潮社
 井本農一 (1968) 『芭蕉記 ― その人生と芸術』 講談社
 現代新書
 大石慎三郎 (1970) 『元禄時代』 岩波新書
 大石学 (1944) 『元禄時代と赤穂事件』 角川選書
 加藤徹 (2011) 『本当は危ない「論語」』 NHK 出版新
 書
 竹内誠 (2000) 『元禄人間模様』 角川選書
 田中善信 (2008) 『芭蕉二つの顔』 講談社学術文庫
 奈良本辰也 (1950) 『吉田松陰』 岩波新書
 松島栄一 (1964) 『忠臣蔵』 岩波新書
 丸谷才一 (1988) 『忠臣蔵とは何か』 講談社文芸文庫
 吉村昭 (1995) 『桜田門外ノ変』 新潮文庫